

## はじめに

25年前にドイツ、フランス、スイスの福祉を訪ねる旅に出た。当時は、法人の一職員であり、現在のような立場ではなく、その点では、見る視点も変化してきた。海外研修にあたり、スウェーデン、フィンランド、スイス、3カ国の文化、歴史、政治、福祉を短期間ではあったが、自分なりに事前調査を行った。日本では、地域包括ケアシステムを構築しようとしている前年に北欧、スウェーデンの福祉を見ることができるといふ喜びを持って準備にあたった。研修は、法人50周年記念事業準備のラストスパートの頃、後ろ髪引かれる思いを少々持ちながら、9月5日～15日まで10日間、空を飛び立てば、もう身も心も北欧の文化に溶け込んでいた。

## 1. スウェーデンでの視察

## (1) シグチュナー市での福祉行政

住み慣れた自分の家に住み続ける「環境の持続性」、そして、高齢者本人の「自己決定」、スウェーデンにおける高齢者福祉の原則に基づくコミュニケーション（市）での介護支援の行政からの説明を聞く機会に恵まれた。

施設に入る審査を行う行政グループ部長と高齢福祉部長から説明。二人とも、社会進出が目覚ましい女性であった。

ストックホルムより40分の所にあり、人口4万人。65歳以上15%、80歳以上3%、2020年には高齢者が増。さらに在宅で暮らし続けるための施策を詳しく説明を受けた。ヘルパーは400人、市の職員であり、福祉サービスは市営である。民間委託を行う場合も何かあった場合は、市の責任となっている。

施設では、ケア付き住宅、個室の老人ホーム、ナーシングホーム、グループホームを整備している。



シグチュナー市役所



女性の責任者

## (2) アーリングヘム（特別養護老人ホーム）



玄関



通訳と施設長



居室と廊下

施設での生活環境は、落ち着いた居住空間があり、明るい採光と、庭園が整備された落ち着いたホームだと思えた。ゆったりとした生活のように見えたが、説明では、人員の配置基準が理解できなかった。見学している限りでは、それほど、職員が多いようには見えなかった。参考になった事は、暮らしやすい環境整備であった。



リビング



個室

天井走行リフトの介護環境は、私の法人内の施設では、完備しているので、同様の考え方で活用していることに当法人の方向性に自信を持つことができた。

### (3) ソデクソ補助器具センター

介護機器の活用という点では、充実していることが機器メーカーの理学療法士、作業療法士の説明で理解できた。在宅での自立した生活を支援するための介護機器であり、介護機器メーカーが、日本においても収支が見合うように生活に密着した取り組みと事業としての定着をいかに行えば良いのだろう。多様な車椅子、介護機器は、特に目新しいものはなかった。



介護機器説明

天井走行リフトの活用方法についての説明では、「2人でリフト運用している、という事であったが、当法人での天井走行リフト活用が、合理的であると感じた。

(『福祉介護テクノプラス』2011年11月号特集、狭間実践レポートに詳しい)

### (4) ガーデン オブ ザ センシス (高齢者・障がい者のための公園療法の実際)



傘をさしている方が責任者



明るい朱色(日本をイメージ)

障害者雇用の観点から、高齢者住宅、施設での庭整備の在り方を考えさせられた。雪に閉ざされる期間が長く、太陽が輝く季節を豊かにしようという思いがこもっていた。スウェーデンでの日本らしい色(ベンチの朱色)について関心を持った。公園の両側に高齢者住宅があり、セラピー公園となっている。水が流れる音、様々な種類の香り、物に触れたり、カラフルな色の物が用意されている。人間の視覚、聴覚、味覚、触覚とバランスの6つの感覚に刺激を与える公園設計になっている。人間の五感全ての刺激を与えることを意識して設計を行なった公園である。公園整備の作業を障害者が支えている。



### (5) スtockホルム市での文化視察

約190年間戦争に巻き込まれなかったスウェーデン王国は、世界「最貧国」から「高福祉国家」へ。スカンジナビアでの福祉は、母体の保護に始まり、行き届いたサービスが提供され、全ての人々に健康で文化的な生活が保障されている。ストックホルム市は、人口900万人。



ストックホルムの街の様子

ストックホルムを中心に文化視察をさせて頂き、スウェーデン国民の生活の一端を見ることができた。

事後調査の課題としては、この国の生活、福祉の有り様をしっかりと理解し、私自身がどのような福祉を目指すのか。今後、引き続き研鑽したい。ストックホルム市内、郊外の様子を現地に住んでいる通訳の方から話を聞き、生活の様子を少しだけではあったが、知る機会を得た事は有意義だった。